

4 年制大学の進路支援における 心理学的援助の役割と実践

井 本 恵 章
青 木 敬 章
長谷川 恭 子
中 谷 桂 子

は じ め に

大阪経済大学において就職支援の従来の体制に加え、2010年10月からカウンセラー4名を配置し就職困難な学生の心理学的援助を含めた就職支援を行うようになった。その背景には、大学卒業者の就職難が大きな社会現象となり、国家的課題として、厚生労働省、文部科学省が具体的取り組みを推進したことがある。本学の進路支援センターでは、心理・社会的な困難を持つ学生に対して心理カウンセリングが必要な場合は、学生相談室の利用を促しながら、就職活動が推進されることを目的に支援を実施している。本稿では、新規学卒者の就職支援の分野において心理学的援助の役割と重要性を、これまでの進路支援センターの実践を通し社会背景やキャリア理論をベースに論じる。第1章では、大学生の就職活動を取り巻く環境（社会や産業構造）の変化を通じて低調な就職内定率の要因を説明するとともに、学生との面談を通じて感じたことを述べる。第2章では、発達障害やの特徴を持つ学生の特徴や現状を述べ、事例をもとに図も用いながら支援のあり方を検討する。第3章では、キャリア理論を大学の就職支援の場でいかに適用していくか実際のアプローチについて詳細に論述する。

1. 低調な就職内定率と就職活動を取り巻く環境の変化

1-1. 大学生の就職事情

経済の先行き不透明感などを反映して大学新卒者の就職活動は厳しい状況が続いており、就職活動の早期化による長期化への批判の高まりに応え日本経済団体連合会の「大学卒業予定者・大学院修士課程修了予定者等の採用選考に関する企業の倫理憲章」が見直された（日本経済団体連合会、2011）。この見直しにより2013年3月大学卒業予定の学生からは、正式な就職活動開始時期が3年次の12月1日となり、既にその活動を開始させている。

一方、憲章見直し前に就職活動を開始した現在4年次の学生については、厚生労働省（2012）の発表によると、就職活動開始後14ヶ月を経過した2011年12月1日時点の就職内

定率は71.9%と過去2番目の低水準となっている。早々と4年次の春先に内々定を獲得した学生がいる一方で、就職活動の長期化を余儀なくされた学生が内定獲得のために1学年下の学生と並行して卒業間際まで就職活動に奔走していることは異常とさえ思える。

例年、厚生労働省が発表する大学卒業直後の4月1日時点の就職率は90%を超える数値を示しているものの、サンプルの偏りなどの要因により実態より高くなる傾向がある（小川，2011）。就職活動中に就職を諦めた学生はフリーター・ニート予備軍であり、労働行政の要請に従ってこれらの学生を極力減らしていこうという取り組みからハローワークに臨床心理士等が配置され心理的なサポートを行う取り組みも平成22年度から行われるようになった（厚生労働省，2010）。

1-2. 社会や産業構造の変化

日本は少子高齢化時代に突入し、戦後の高度経済成長時代から続いてきた人口ボーナスを享受できなくなり、人口オーナスの時代に移行したと言われている（小峰，2007）。GDPにおいても2010年には中国に世界第二位の座を奪われ、数年すればインドに世界第三位の座をも明け渡すことになると見られている。それに加え、2008年にアメリカで発生したリーマン・ブラザーズの破綻を契機にしたリーマンショック以降は、緩やかに続いていた景気拡大も一気に後退するとともに有効求人倍率の低下につながっており、大卒での就職は超氷河期の再来とも呼ばれるほどである。

また、総務省（2008）が実施した国勢調査によると、平成17年度の産業構造は第一次産業従事者の割合が4.8%、第二次産業従事者が26.1%、第三次産業が67.2%となっている。言い換えれば、一次産業従事者が20人に1人、二次産業が4人に1人、三次産業が3人に2人という割合である。これを40年前（昭和40年）の数値と比較してみると、一次産業が25%、二次産業が30%、三次産業が44%であり、大きく変化していることがわかる。つまり、農林水産漁業の従事者は激減、建設・製造業は5ポイント減、サービス業は20ポイント以上の急増となっている。その一方で新規学卒就職者の割合を見ると、1960年代に10%前後であった大卒者は、2000年には50%に迫るほど急増し高卒者を上回るまでになっており（今野，2009）、就職を希望する業界も変わらざるを得ない状況にある。

製造業の従事者の減少は、中国など人件費の安い新興国への生産シフトが急速に進み、国内産業が空洞化したことが要因のひとつであるが、これまでの経済・雇用の牽引役であった電機・自動車産業でも例外ではなく雇用の受け皿としての機能を失いつつある。そして、サービス産業主体の産業構造へと移行していく中で、企業が学生に求める必要な能力も「体力や技術力」等から「対人関係能力・コミュニケーション力」等に移行してきていると思われる。

1-3. 就職活動が長期化する学生

筆者が進路支援センターでの相談を通じて感じるのは、就職活動が長期化する学生の共通的特徴として、書類審査（履歴書やエントリーシート）やペーパーテストは通過する

ものの、面接をパスできないことである。面接回数が少ないうちは「縁がなかった」で済ますことができたとしても、何回も不採用となることで自己評価が低下し、中には「自分は社会から必要とされていないのではないか」と考え始める学生も少なくない。一般に学生の多くは大企業の事務職志向であり、限定された職種の競争率はかなり高いこともありミスマッチを生むことを懸念されるが、就職活動が長期化する要因はそれだけではない。

これまで説明してきた環境変化の中で、座学は得意だが人間関係に多少の弱さを抱える学生や、自己理解が低い学生、現実検討力の低い学生、意欲が無い学生などが度重なる就職試験の不合格の中で精神的な落ち込みを見せることが多くなっているように見受けられる。進路支援センターを訪れる中には、抑うつ傾向を見せる学生も増加傾向を見せている。

2. 発達障害学生と進路支援

2-1. 発達障害やその特性を持つ学生

近年、大学における発達障害学生への支援の必要性が高まっている。大学に進学する学生の発達障害は知的障害を伴わない自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）であり、それらには、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能自閉症（HFA）などが知られている。独立行政法人日本学生支援機構が1220校の大学・短期大学・高等専門学校を対象に実施した調査では、2011年5月現在で、すべての学校から回答を得られており、その結果、大学では、LDが71人、ADHDが98人、HFA等が696人、計865人のASD学生の在籍が報告されている（日本学生支援機構、2011）。しかし、これらは診断書があるものを対象としており、それ以外にもASDとは診断されずに配慮を受けている学生や、学生自身が気付いていない場合を考慮に入れる必要があり、実際にはここで示された数値以上に学習に困難さを抱える学生が多いと思われる（楠本、2010）。

最近、これまでのカテゴリーや診断基準では判定できないASDの一つとして、幅広い自閉症の表現型（The Broader Autism Phenotype: BAP）と言われる新たな概念が提唱されている。BAPは、自閉症の3つの基本症状である、コミュニケーション障害（言葉を字義通りに受け取るなど）、社会性の障害、想像性の障害と固執傾向（同じ状況へのこだわりが強く新しい状況に適応しづらい）のうち1つ、あるいは2つの特徴を抱えており、より緩やかな自閉症の特徴を持つものと捉えることが出来る（Losh *et. al.*, 2008）。また、自閉症の家族研究や、最近の遺伝子解析などからBAPも遺伝的な素因を含む、何らかの生物学的な要因による中枢神経系の障害とされ、生まれつき、あるいはごく早期から発症し、医学的に根本から治す治療法はない（福田、2008）。さらに障害の程度は様々で、基本的にASDの特徴を持ちながら適応している場合は、特別な支援は必要とされないが、新しい環境やこれまでと違う能力が必要とされる大学や就職後の社会生活では、新たな困難を抱える場合が多い。現状の対策として、ASDの特性を周囲や本人が理解し、自尊心の低下やうつ症状などの二次障害を起こすことなく、社会に適応していく力が身につくよう、支援する必要がある。

2-2. 大学での取り組み

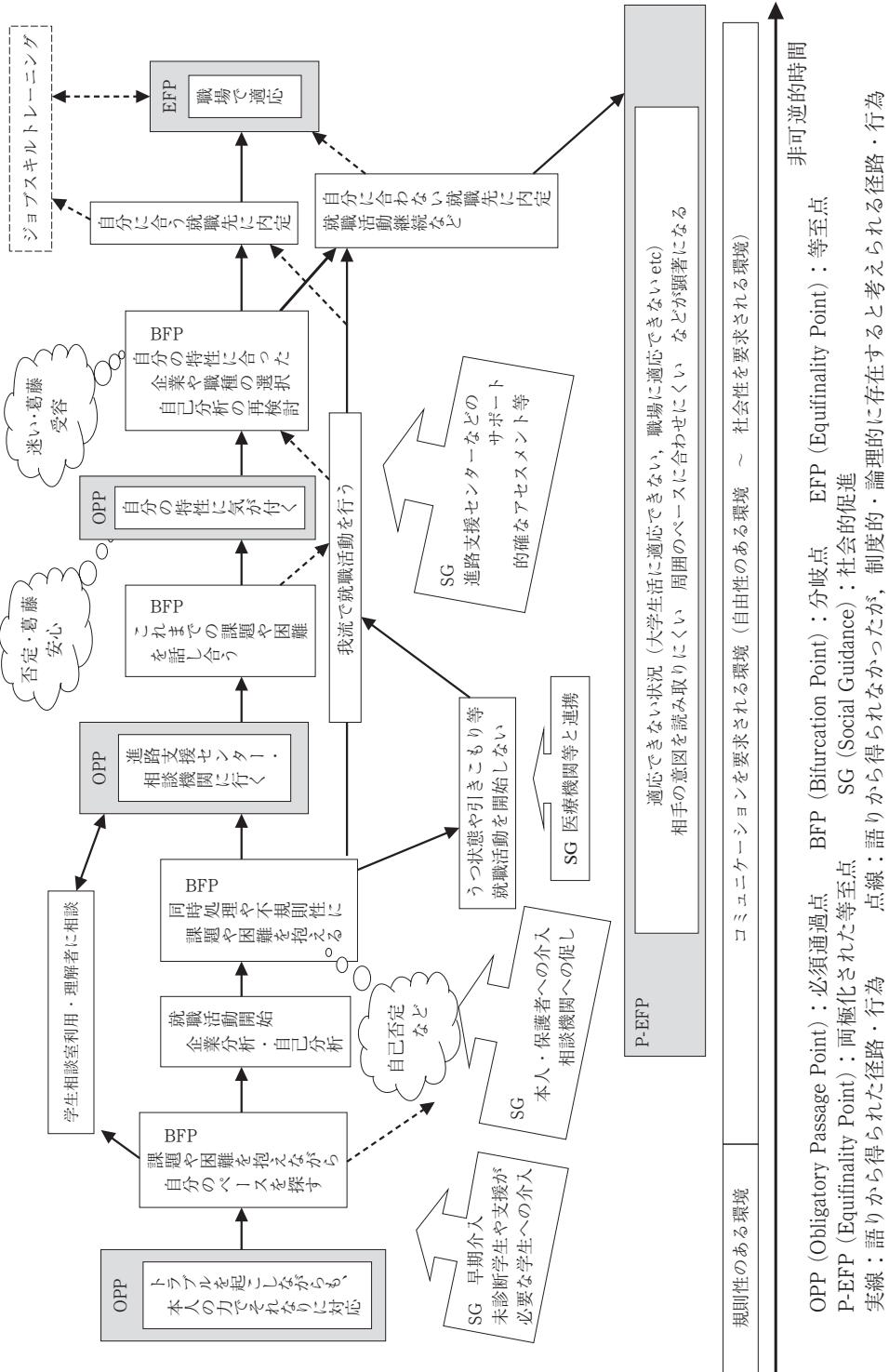
2007年に特別支援教育が学校教育法で位置づけられ、ASD 児童や学生に対し幼少期から支援や対応がなされ始めている。大学に進学する ASD 学生やその特性を持つ学生の多くは、対人関係などに問題を抱えながらも、高校までの規律ある学生生活ではなんとか適応している場合が多い。しかし、より高い「コミュニケーション」能力が要求される大学や職場においては、これまでの対応では応用が効きにくく、新たな問題が顕在化することがある。ASD と気分障害は内的な関連があり、セロトニン系の神経系の脆弱性が明らかになっている（杉山，2011）。そのため、大学進学後や就労してから、新しい環境にうまく適応できずに不適応が度重なると、二次障害としてうつ状態になることも少なくない。こうした状況を踏まえて、各大学では ASD 学生に対し、教職員や学生に対する理解啓発をはじめ、学生相談室、保健センター、キャリアセンター等の役割分担に基づいた支援体制の構築を行っている（国立特別支援教育総合研究所，2007）。

2-3. 就職活動支援の進め方

図は、筆者が面談した ASD や BAP と思われる 3 名（進路支援センターで面談したものが 2 名、他機関で面談したものが 1 名）のケース記録を元に、KJ 法（川喜田，1967）を援用し、人間の経験を時間的変化と文化・社会的文脈との関係で展望することを目指す方法論である複線径路等至性モデル（TEM：サトウ，2009）を用いて分析したものである。等至性とは、異なる初期状態や異なる道筋からでも同じ状態にたどり着けるのだということの意味している（Valsiner, J. and Sato, T., 2006）。ASD や BAP である人は、生まれつき持っている遺伝子型による脆弱性と環境要因の相互作用によって不適応になることが認識されている。図では、新たな不適応が生じやすい大学の入学前を始まりとし、就労後までのプロセスを就職活動を中心に時系列に整理し、周囲がどの時点で、どのような支援を行えば良いかも示している。

図に示すように、面談した 3 名の内 1 名は学生相談室を利用しているが、他 2 名は、いかなる専門機関にも繋がっていなかった。ただし、3 名とも幼少期から周囲とトラブルを起こしながらも自らの力で適応してきたことが伺われた。大学入学後の学生生活は、各自それぞれであったが、工夫しながら単位取得後卒業している。ASD や BAP である人は、処理プロセス容量の低さから基本的な学習の非効率状況を生じやすく（水上，1994）、同時処理で物事を行ったり不規則な出来事に対応したりする際、困難を抱えることが多い。在学中は本人がそのような場面を取捨選択できたり時間をかけて対応したりすることもあったが、就職活動や職場では、本人が理解していなかったり周囲に告知していなかったりした場合、本人の意思ではそうすることが出来ない状況にあり、更に困難を抱え込んでいることが伺われた。又、ASD の特徴から問題が生じていることもあった。例えば、就職活動の面接の場面では、面接官の質問の意図を汲み取れずにありのまま応答したり、適性検査では、自分の調子が悪い状態を想定して回答したりしていた。失敗経験を繰り返した際、相談する場所や人が見つからず一人で抱え込む期間が長くなると、うつ状態になったり就

図 発達障害の特徴がある人の就労後までのプロセス



職活動を休止したりしていた。又、他機関で相談を受けた1名は、大学卒業後自分に合わない職場に就労し、自分に合う就職先に就労するまで6年を要している。図中には、支援機関に繋がらなかった学生や、その他の考えられる径路を点線矢印で描いている。

ASD 学生に限らず、心理的問題を抱えた学生の中には学生相談室に対する偏見からその利用を回避するケースも少なくない。逆に、心理的問題を抱え学生相談室を利用している学生の中には、進路支援センターのような開放的な面接構造に抵抗を示す学生もあり、そのような学生に対しては、学生相談室との連携や進路支援センターの面接構造の検討も今後必要となってくる。ASD や BAP が疑われる学生の場合は、これまで自力で解決した経験もあり、困難な場面に遭遇しても、「些細な事」として相談を躊躇う学生も中には見受けられた。発達障害を背景とした二次的な心理的問題が大きい場合は、個人心理療法というアプローチも有効（大山・廣澤，2007）であり、また、進路支援センターで相談を受けることは、他学生と同様に、「就職活動の相談」という大義名分があり、相談を躊躇う傾向がある学生に対して利用しやすいのではないかと考える。本事例においても、一人で抱え込むことによって問題解決に至らないことがあった。就職活動の相談を機に、学生の幼少期からの困難さを聴き取ることで、学生の特性を的確にアセスメントし、不適応に陥らないよう進路支援を行うことが、支援者にとって重要な責務となるだろう。

3. 心理学的援助の必要性について

3-1. 心理学的援助の必要性

大学生にとって、就職活動は学生から社会人への移行（トランジション）のプロセスそのものである。学生は就職活動により社会的自立のできる能力を発達させながら、変化を受容していこうとする。そして、就職活動が自分と向き合うチャンスともなる。自分がどう生きるかと問うことや、現実の自分を見つめる機会がさまざまな場面で出てくるため、自分と向き合わざるを得なくなる。あるいは向き合うことを避けようとする。就職活動は進路決定を目指す、青年期の「アイデンティティ形成の途上にある大学生にとって、進路決定は社会的な側面だけでなく、心理学的にも大きな出来事である（土田，2010）。」個人としての生き方の定まらなさ、社会人になることへの期待と不安、就職活動全般への戸惑いなど、学生が迷い、恐れ、焦りを感じる場合も多い。そのために、個人差はあるものの、学生は就職活動によって不安定な状態になることがある。渡辺（2007）によれば、シュロスバーク（1995）は「トランジション」を転機と捉え、しばしば途方にくれることや、心的外傷を受ける経験となる一方、成長のための変化をもたらす素晴らしい機会を提供するとしている。どのように「トランジション」を経験するかが今後の人生を変えていくといっても過言ではない。自分の特性に気づくチャンスとなることもある。学生が十分に考え向き合うことや、不安や葛藤に揺れ動く気持ちに寄り添うことによって、それらを乗り越えることの一助となる可能性がある。心理学的援助が、就職活動にどれだけ影響を与えるかを具体的な数値でつかむことはできない。しかし、心理学的援助は、就職活動のプロセスに直接訴えることができ、就職活動を支えていくことに寄与するものとなる。

3-2. 心理学的援助の領域とその対象, 方法

心理学的援助は、臨床心理学的援助とキャリアカウンセリングの2領域が考えられる。前者は就職活動をしている学生そのものを支える関わりとして、個人の内面に深く関与する。個人には独自の世界があり、その独自の世界をできるだけ理解していこうとする。学生の落ち込みやイライラなどの感情状態の理解、発達障害を含む心理的問題の理解などは、専門知識を使っておこなう。後者は就職活動そのものに含まれる、職業適性、就職活動の進め方、面接の受け方や履歴書の添削など実務的な内容が中心となる。2つの領域は線引きすることができず、両方が絡み合っているといったほうがいいだろう。次に、進路支援センターにおいて、実際にどのように考えどのようなアプローチをしているのかを、筆者の経験から示し、心理学的援助が就職活動を支える可能性を明らかにしたい。

3-3. 心理学的援助の実際

進路支援センターにおいて、筆者たちカウンセラー（以下 Co. と記す）は、心理的問題を抱えている学生や Co. の相談を希望する学生を中心に、履歴書の記事を添削するなど、相談業務に携わっている。言い換えれば、心理学的援助を必要としている学生に、臨床心理学的理解をベースとしてキャリアカウンセリングを行っているといえるだろう。キャリアカウンセリングは、情報の収集からアセスメント、目標の設定、課題の設定、目標達成に向けた行動計画（宮城，2004）と進んでいき、継続した援助ができていない学生については、そのような流れで行っているが、殆どの学生の場合は、その一部を担うのみに留まっている。どんな場合も、学生の話に耳を傾けていくことを心がけるようにしている。

Co. は、「学生が何を求めて来談しているのか」「学生の特性はどういうところで、その特性が就職活動にどのように使えるのか」「学生の抱えている問題が就職活動にどう影響を与えているか」等、学生を取り巻く環境について聴きながら考えていき、アセスメントをしていく。進路支援センターでは心理的問題を直接扱わないため、さらに心理治療的な関わりが必要な学生の場合は学生相談へのリファーを検討する。アセスメントでは、学生が本当に求めているもの、つまり、隠れた主訴を見つけ出すことも大切である。ある事例では、就職活動の方法を相談の目的としていた学生は、実は内定がもらえず落ち込んでいて、ただ聞いて欲しかったということがあった。面接に落ちる経験は、誰にとっても傷つきが深い。否定的な経験を乗り越えるために、まず、悔しさや苛立ちなど、現在の気持ちを十分に聞いていく必要がある。また、気持ちが前に出すぎて焦っている学生は、話すことで落ち着き、「何より、同じゼミの友達に負けたくなかったことに気づいたことが大きかった」と言った。面接の結果待ちのしんどさを、まったく違う質問でごまかしていた学生もいた。語られている言葉以外のものに目を向けていくことや、学生がどのように就職活動を体験しているかを想像することが、隠れた主訴を見つけ心理的な苦痛を乗り越えるのに役立っている。話すことで心理的負担が少しでも軽くなれば、学生のモチベーションや自己肯定感が回復し、今後の対策を考えるなど、未来に向かって動くことができるようになっていく。

学生の特性を理解することは、学生の外見や話し方、語られている内容、履歴書の文章など表現された形態からもヒントを得ることができる。筆者は心理的問題も含め、学生ひとりひとりの個性性をできるだけ理解していくことが、Co. の役割の中でも特に重要であると考えている。心理的問題をもった学生に共通しているのは、強い不安、傷つきやすさ、ストレス耐性の弱さ、自己の過大あるいは過小評価などによる等身大の自分への理解の欠如、こだわりが強いことなどである。前述したように丁寧な関わりが必要であることや、それに加えて、学生が不安を克服するためにも、相談を継続するよう次回の来室を促している。

就職活動では自分を売り込むということが必須であり、自分をどこまで理解しているかということが影響する。自分がどんな人間だと問われて、答えに困る学生は少なくない。お互いに気を遣い自分を表明することに慣れていないという現在の風潮（川俣，2008）も、自分のことが分からないということのベースにあるように思う。Co. から学生の特性を告げることはたやすいかもしれない。しかし、それが果たしてその学生に合っているかも分からないし、自己理解が深まらないまま表面的なものとなってしまう、面接で上手く話せない要因にも繋がる。そのため Co. は、学生本人が自分自身の特性に気づくことを促す関わりをしていく。それは、日常のエピソードなどの雑談から始まり、学生と Co. の会話の積み重ねにより2人で探求するといったほうがいいかもしれない。自分を売り込むことは自分の特性を肯定的に表現することであり、自分についてのネガティブな思い込みを変換していく。これは Co. と学生の共同の作業だと言えるだろう。例をあげると、見るからにおとなしい学生が、自分が消極的であることをネガティブに捉えて語っていた。話を聞いていくと、一つ一つ確認しないと前に進めないことが分かったので、慎重であることを伝えたと、学生が、旅行に行く前に細かく下調べをするというエピソードをふと思い出し、話し出した。そのようにして消極的であるということが、慎重であることや計画性をもって行動するというストーリーに変わっていった。つまり上記の学生の例は、キャリア理論の集大成ともいえるキャリア構築理論を提唱したサビカス（2005）によれば、「解釈や人との関わりのプロセスはキャリアストーリーの中で語られ、キャリアストーリーは個人にとって意味のある選択や役割に適應するために個人が用いるライフテーマを明らかにするという。キャリアストーリーとは、なぜ個人がそのような行動を取るのか。その意味が含まれている（渡辺，2007）。」の好例だと言える。学生との雑談や履歴書の短い文章にはキャリアストーリーが含まれているため、関心をもち注意して聞く必要がある。また、キャリアストーリーには、職業レディネス（本間・金屋・山本，2007）を知る手がかりが散りばめられている。

次の例は、学生のイライラした気持ちの意味を探求することから始まった。履歴書の文章の添削に不満を述べる学生がいた。添削をした人に不満を言っていると思ったら、実は自分が書いた文章への不満であった。学生は合格するため、志望職種が求める人物像を本やネットで調べ、無理して自分に当てはめ、履歴書の文章に表現していた為、自分らしくないと感じイライラしていたのだ。学生の特性の中にある要素と、求められる人物像を結び付けて行く作業が進むと、学生の顔色はみるみるうちに明るく変化していった。このよ

うに、学生の来所時の心理を紐解くことも重要な役割と言えるだろう。それには、学生が書いた履歴書の文章に、どこまでリアリティを表現できているかを十分吟味する必要がある。以上、心理学的援助の一部を述べた。学生の個別性の理解というものを特に強調したい。

3-4. 心理学的援助の可能性と今後の課題

職業と個人との関係が変化している中で、最近のキャリア理論の潮流がカオス理論の応用（渡辺，2007）であることから、筆者は学生を取り巻くひとつひとつのできごとの積み重ねが、学生の進路を決定していくその偶然性について改めて考えた。学生と Co. の出会いが一度きりになるケースが多く、その点での不十分さはあるが、Co. のたった一言が、少なからず影響を与えるという重さを感じることや、些細な出来事にも重要な気づきへの道が開かれていることも多い。これらによって心理学的援助の可能性が広がると思う。現在のシフトでは、ひとりの Co. が継続的に学生をフォローすることができにくいいため、今後は Co. 同士のコミュニケーションをより強化すること、他の職員との連携、学生相談室との連携など、チームとして学生を支えることに、力を注いでいきたい。心理学的援助が必要であるにもかかわらず来所できない学生への対応、心理的問題の発生を予防するなど、相談業務に留まらず、フィールドを広げることも筆者たち Co. の役割となってくるように思う。

お わ り に

大学における学生への個別的支援の一部に、学生相談室のように限られた空間で行われる心理臨床の個人面接の他、進路支援においても心理臨床的対応をベースに置いたカウンセラーの心理学的援助の役割が重要になってきている。進路支援センターにおける相談業務は心理臨床行為の基本となる構造化された個人面接とは異なり、面接時間の枠も明確に設定しえない場合が殆どであり、重要な要素である「終結」の概念も適用しきれないケースが多々ある。このような面接においては、既存の心理学的援助にはない対応も含めて、模索的に心理学的援助の可能性を探っていくことが求められる。進路支援センターにおける実際の相談業務から得た知識や経験を通して日々研磨していかななくてはならない。そして、特に一般の支援に適応することが困難な学生を社会人として適応するよう支援する為に、これからも学生の適切なアセスメントを始め大学内外の連携を視野に入れていきたい。

文 献

- 福田真也（2008）発達障害の大学生に対する大学と医療の連携—診断と告知を中心に—大学と学生，60（通巻534），6-15.
本間啓二・金屋光彦・山本公子（2007）キャリアデザイン概論，社団法人雇用問題研究会，p 70.
今野浩一郎・佐藤博樹（2009）人事管理入門 [第2版]，日本経済新聞出版社，pp 13-16.

- 川喜田二郎（1967）発想法—創造性開発のために—，中公新書，東京，pp 66-114.
- 川俣理恵・河村茂雄（2008）現代大学生の交友関係と自我同一性地位との関係についての事例的検討：友人に対する気遣い志向の強い大学生の事例から（発達），日本教育心理学会総会発表論文集第50回，320.
- 国立特別支援教育総合研究所（2007）発達障害のある学生支援ケースブック—支援の実践とポイント—，ジアース教育新社.
- 小峰隆夫（2007）経済が変える人口と人口が変える経済，小峰隆夫・日本経済研究センター（編）超長期予測老いるアジア—変貌する世界人口・経済地図，日本経済新聞出版社，pp 50-57.
- 厚生労働省（2010）新卒者に対する就職支援の強化について，
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000sf7z-img/2r9852000000sfbq.pdf>（2012.2.2.取得）
- 厚生労働省（2012）平成23年度「大学等卒業予定者の就職内定状況調査」，
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000205zo.html>（2012.2.2.取得）
- 楠本久美子・八木成和・広瀬香織（2010）大学・短期大学における発達障害及びその疑いのある学生への支援の現状と課題，四天王寺大学紀要，49，447-460.
- Losh, M., Childress, D., Lam, K. and Piven, J. (2008) Defining key features of the broad autism phenotype: a comparison across parents of multiple- and single-incidence autism families, *Neuropsychiatric Genetics*, 147B, 4, 424-433.
- 宮城まり子（2004）キャリアカウンセリング，駿河台出版社，東京，pp 145-146.
- 日本経済団体連合会（2011）新卒者の採用選考活動の在り方について，
<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/001.html>（2012.2.2.取得）
- 水上志子（1994）発達障害における同時処理・系列処理とその統合について：数課題からの検討，北海道大学部紀要，64，97-101.
- 日本学生支援機構（2010）平成22年度大学，短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査結果報告書.
- 小川雅弘（2011）大学生等就職内定状況調査の一考察，大阪経大論集，325，81-108.
- 大山卓・廣澤愛子（2007）高機能広汎性発達障害の子どもの心理臨床査定についての一考察，愛知教育大学実践総合センター紀要，10，15-24.
- サトウタツヤ（2009）TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして—，誠信書房，東京，pp 33-54.
- 総務省（2008）平成17年国勢調査 第2次基本集計結果「結果の概要—3産業」，
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/kihon2/00/03.htm>（2012.2.2.取得）
- 杉山登志郎（2011）発達障害のいま，講談社現代新書，東京，p 193.
- 土田恭史・平部正樹・田島佐登志・川原正人（2010）大学生の職業決定と自我発達との関連，目白大学心理学研究第，6，13-24.
- Valsiner, J. and Sato, T. (2006) Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? In Straub, Kölbl, Weidemann and Zielke (Eds.) "Pursuit of Meaning. Advances in Cultural and Cross-Cultural Psychology", Transcript Verlag, pp 215-252.
- 渡辺三枝子（2007）新版キャリアの心理学，ナカニシヤ出版，東京，pp 132-199.
- Schlossberg, N. K., Water, E. B., & Goodman, J. (1995) Counseling adult in transition: Linking

practice with theory (2nd ed.) New York: springer.

Savickas, M. L. (2005) The theory and Practice of caree construction. In S. D. Brown & R. W. lent (Eds.) Caree development and counseling: Putting theory and research to Work. Hoboken, NJ: John wiley & Sons, pp 42-70.